第一章 创設期（九〇二九～九三四）

朝鮮イエス教

長老教会と朝鮮監理会による宣教の時期

この章は、第一章「朝鮮イエス教の伝来」、第二章「朝鮮の伝統と女性の位置」、第三章「朝鮮へのキリスト教教の伝来」、第四章「留学生と朝鮮基督教青年会」、第五章「在日朝鮮基督教の伝来」、第六章「関東大震災と東京八独立宣言」、第七章「朝鮮基督教の会」、第八章「男性たちのハーストリー」からなり、最後に「まとめ」と「註」が付けられる「まとめ」と「註」は、章毎つく。

第二節、三節にハングルについての言及があり、「聖書を読むためにハングルを習う」とことによって、女性の中に文字が広く普及した——（四頁）ことが指摘されていることは印象深い。文字の普及は自立と解放を促す。本书で取り上げられた七人者のバイブル・ウーマンはいずれもハングルの聖書を学び、それと共に生き、それによって生きできたはずである。そして彼女たちをとおして数えられない女性と子どもたちが聖書に触れることになったであろう。

九〇九九年二月八日、東京朝鮮YMCAに朝鮮からの留学生約四〇〇名が集まって二・八独立宣言を発表した。朝鮮人の独立運動の導火線となった重要な出来事である。女性留学生たちは、二・八宣言文を準備するために必要な資金をカンパして運動を支え、という。独立宣言文を起草する際、男子留学生たちは女子学生を無視して自分たちだけで進めるとした。そのとき、黄愛施德（「黄愛德」）が立ち上がった。「三三七、彼女は他の四名の女子留学生と、もっと二八独立宣言の集会に参加。その後日本女性に変装し、もと二八独立宣言の集会に参加。その後日本女性に変装し、帰国して運動を支え、という。独立宣言文を完成のの中に隠して朝鮮に帰り、三・一運動に参加し、以後女子学生たちと共に議論して二・八独立運動を準備したという。（三三七。彼女は他の四名の女子留学生と、もっと二八独立宣言の集会に参加。その後日本女性に変装し、帰国して運動を支え、という。独立宣言文を完成のの中に隠して朝鮮に帰り、三・一運動に参加し、以後女子学生たちと共に議論して二・八独立運動を準備したという。）
第二章「成長期」

連合図書会とカナダ長老教会による宣教の時期

この章は、第一節「朝鮮イースト教会連合図書会による宣教（「九五」「九七」）、第二節「朝鮮イースト教会、伝教士」、第三節「カナダ長老教会（P.C.C.）による宣教（「九五」「九七」）、第四節「カナダ長老教会に向けた宣教（「九五」「九七」）、第五節「在日朝鮮基督教教会（「九五」）」を含む。

在日朝鮮基督教教会は、「九五」年をもって教会法人としての体を保つことが可能となった。しかし、教団が独立した時期はまだ遠かった。その後、日本基督教団が組織され、朝鮮教会はより独立した地位を占めることになった。

「九五」年には、朝鮮基督教団が、朝鮮在外教会として成立した。これにより、朝鮮基督教団は、日本基督教団とは独立した教会法人として活動することができるようになった。

本章では、朝鮮基督教団の組織的発展を追求し、その活動の歴史を詳しく調査した。その中には、朝鮮基督教団の組織的発展を求めるための努力や、日本のキリスト教社会との関係についての考察が含まれている。

第三章「自立期」

「九三」年から「九九」年まで

在日朝鮮基督教会の時期

この章では、朝鮮基督教団の自立期の活動を調査した。この時期は、朝鮮基督教団が自立した教会法人として活動することができるようになった時期である。

朝鮮基督教団の活動の内容や、その活動を通じて得られた教訓を調査した。特に、この時期の朝鮮基督教団の活動は、朝鮮基督教団の自立を求める活動や、朝鮮基督教団の地域における活動を含む。
この章は、第一節「時代背景」、第二節「神社参拝問題」、第三節「日本朝鮮基督教教会の創立」（一九三四年）、「第四節「女性の働き人たち」からなる。

日本朝鮮基督教教会で働いていた事実を知って驚かされる。

その一人、丁海金は、一九三五年に平壌女子神学校卒業後すぐに岡山朝鮮基督教伝道師として赴任し、その後名古屋西部教会生徒であった崔文植敬事が、教会学校を懷古して書いた文章が紹介されている。

丁海金の職員は、女の職員として、チョン・ヘグム（丁海金）伝道師がいたことを記憶しています。この人達は皆一日に天使のように威厳があり、神々しく見え、その職員達の前ではいたずらも出来なかった。丁海金（チョン・ヘグム）先生の姿は今も頭の中にはっきりと残っている（このチョン・ヘグム先生の姿は韓国の六・二五事件当時、殉職したことをも含む）。

わずか六年余の短い自立期間ではあったが、組織の自治と自立が計られ、在日朝鮮教会団の自立の実現に向けたものである。戦後すぐに日本基督教団から自立し、在日大韓基督教教会が組織教会として歩み出す発端がここにある（一九三一年）。
六年の自立期間とその後の再出発の関係について、またその六年間が持つ今日の意味について、別の機会により詳しく論じていただければと思う。

第四章 受難期（九四〇—九四五）　日本基督教

ミッションの苦難

この章は、第一章「時代背景」、第二章「合同問題と旧朝鮮基督教」、第三章「旧朝鮮基督教団の時期」、第四章「合同問題と旧朝鮮基督教」、第五章「朝鮮の働き人たち」からなる。

一九三九年四月八日、宗教団体法が公布され、翌四〇年四月からされるこたえとなった。この宗教団体法は、国家権力に服従する宗教は保護されるが、それに反抗する宗教は厳重に取締 rijarという内容であった。これを二一二五頁。ファシズム体制の確立が日本基督教に一体化することになっていく。著者は、最も大きな問題は、日本語使用の規定づけである。これは日本基督教の憲法則にないことである」と指摘する。

朝鮮基準にとって、布教における日本語使用は最も困難な問題であった。それは民族教会としての本質に関わることであり、朝鮮語による伝道ということがゆずることのできないことである。実際、当時の在日朝鮮人社会では日本語をいうことであった。
創氏改名を強硬に進めるも、頼なに日本名を使用して
女性たちが日本語で行われるようになって、教会
に行くのをやめた。それらの魂に慰めと励ましを与えられたのは、
女性伝道師たちであった（同）。

さらに事態は進み、一九四一年一月四日、日本基督教会
創立総会が開催され、旧朝基は日本基督教会の所属として教
団第一に加入することになった。

この言葉の中で注目すべきことの一つは、豊橋、桑名、そし
て横須賀の教会で働いた女性伝道師、李貞愛の書いた「朝鮮
基督教人迫害弾圧状況調書」である。これは一九五五年八月
の解放後、在日本朝鮮基督教連合会創立準備委員会が配布、
回収したものです。本書には貴重な現物写真が掲載されている
唯一のものだという。本書には貴重な現物写真が掲載されている
唯一のものだという。本書には貴重な現物写真が掲載されている
唯一のものだという。本書には貴重な現物写真が掲載されている
唯一のものだという。本書には貴重な現物写真が掲載されている
唯一のものだという。本書には貴重な現物写真が掲載されている
唯一のものだという。